令和5年度　学校評価（案）

愛南町立一本松小学校

［ 評価基準　A：目標を達成　B：目標値の8割以上達成　C：目標値の6割以上達成　D：目標値の6割未満 ］　【アンケート結果　4：そう思う　3：ややそう思う　2：あまわ思わない　1：思わない】

重点目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察　◆改善方策	評価資料	アンケート結果（%）				肯定率(%)	平均(%)
								4	3	2	1		
1　確かな学力の定着と向上	（1）	個に応じた指導と基礎学力の定着・向上ができたか。	教職員、児童の**90%**以上が肯定している。	中間期	B	◇昨年度のこの時期と同様に教職員、児童ともに目標値を下回っている。教職員は、1単位時間毎の評価及び単元テストの結果から学力の定着に手ごたえを感じていない。また、児童の中にも自身の学力が身に付いていないと感じている割合が増えている。 ◆まず、学級担任が児童に学習への意欲や目標を持たせ、集団として達成感を味わわせる学級経営を行う。そして、各教科担当者は、学習のねらいに沿った指導で、どんな学力が身に付いたか児童に自覚させる手だてを図る。	教職員アンケート①	9.1	63.6	27.3	0.0	72.7	78.4
							児童アンケート②	43.4	40.6	13.2	2.8	84.0	
				年度末	B	◇中間期の反省をもとに指導改善を図り、教職員の肯定率は伸びている。学力が身に付いていると感じている児童も増えている。しかし単元テストの正答率は伸び悩んでいる。特別支援学級では、個別の指導が行き届いており、学力の向上、コミュニケーション力が伸びている。 ◆中間期の改善策を継続し、中間層の引き上げを目指す。テストの平均正答率80%以上の児童を6割以上にすることを目標として、授業改善を図る。目標に達していない学級については、基本的な授業モデルを示し授業の在り方を研修する。 ◆校内研修を進め、共通認識を持って指導にあたる必要がある。	教職員アンケート①	9.1	72.7	18.2	0.0	81.8	85.5
							児童アンケート②	53.6	35.5	9.1	1.8	89.1	
	（2）	ICTの活用と深い学びへの授業改善に努めたか。	教職員、児童、保護者の**90%**以上が肯定している。 対話的な学びの実施率が90%以上（年度末のみ）	中間期	B	◇1人1台端末を用いた学習活動が児童、保護者に浸透してきたことから、それぞれの肯定割合は高い。一方で、ICTの活用場面や方法を指導者が適切に判断できていないことがあり、依然として試行錯誤しながらの段階のため、教職員の肯定割合がやや伸び悩んでいる。 ◆今後は、研修会等を通して効果的かつ具体的なICT活用指導法の共通理解を図り、教育的な視点でその成果を共有することで、より深い学びの充実に努める。	教職員アンケート②	0.0	83.3	16.7	0.0	83.3	86.9
							児童アンケート③	81.3	13.1	4.7	0.9	94.4	
							児童アンケート④	37.7	41.5	17.9	2.8	79.2	
							保護者アンケート②	51.9	38.9	9.3	0.0	90.8	
				年度末	B	◇児童も教職員も肯定割合が伸び悩んでいる。1人1台端末を用いた学習活動が活性化されていない、ということではないか。 ◆対話的な学びの実施率は88%だった。ICT活用やEILSの研修を行い、学習活動の中で有効に使えるようにする。3つの対話を通した深い学びを意識した授業展開を工夫する。	教職員アンケート②	0.0	75.0	25.0	0.0	75.0	88.8
							児童アンケート③	70.9	23.6	2.7	2.7	94.5	
							児童アンケート④	67.9	23.9	7.3	0.9	91.8	
							保護者アンケート②	37.8	56.1	6.1	0.0	93.9	
	（3）	学ぶ楽しさと振り返りの重視による満足感を感じられる授業を行ったか。	教職員、児童、保護者の90%以上が肯定している。	中間期	B	◇児童、保護者の肯定割合は低くないが、教職員の肯定割合が極端に低い。これは、1単位時間における指導のねらいの設定が児童の実態に即していなかったことや、授業中や振り返り活動の段階で想定していた反応や結果が見られなかったためだと思われる。 ◆研修会や個別指導を効果的に活用しながら、教職員個々の学習評価に対する正しい知識を定着させるとともに、授業研究を通して多様な学習指導の在り方を考える。	教職員アンケート③	8.3	50.0	41.7	0.0	58.3	78.6
							児童アンケート①	46.2	38.7	12.3	2.8	84.9	
							保護者アンケート①	44.4	48.1	5.6	1.9	92.5	
				年度末	B	◇教職員の肯定割合は高まったが、保護者の肯定割合は少し下がっている。振り返りを意識した指導、授業展開の工夫がされているが、結果に表れていないということだ。 ◆児童に「できる、分かる」楽しさを味わわせる。ねらい、活動、まとめ、振り返りの基本的な学習指導に立ち返り、授業モデルを参考に授業改善を行う。言葉の力が不十分なことが、児童の学力低迷にかかわっているため、国語科を中心に言葉の力を付ける指導を推進していく。	教職員アンケート③	0.0	83.3	16.7	0.0	83.3	84.9
							児童アンケート①	46.4	37.3	14.5	1.8	83.7	
							保護者アンケート①	32.9	54.9	8.5	3.7	87.8	
	（4）	家庭学習の習慣化に努めたか。	教職員、児童、保護者の**90%**以上が肯定している。 学年ごとに設定した家庭学習時間の達成率が80%以上（←振り返りカードにおける実施率 中間期・年度末）	中間期	B	◇児童と教職員の肯定割合は目標値に近いが、それに比べて保護者の肯定割合が低い。これは、両者の感覚に差が生じていることを表している。学年毎の目標時間は設定されているが、それを十分共有できていないことや、学年によって徹底できていないことが考えられる。 ◆よりよい家庭学習への取組み方について、学力向上主任を中心に組織的な指導を考える。また、学校だよりや学年通信で、その取組を広めることや保健だよりで家庭生活の改善に向けた啓発を継続的に行う。	教職員アンケート④	9.1	72.7	18.2	0.0	81.8	77.5
							児童アンケート⑤	41.1	44.9	10.3	3.7	86.0	
							保護者アンケート③	14.8	50.0	29.6	5.6	64.8	
				年度末	B	◇家庭学習時間の達成率は81．2%だった。教職員、保護者の肯定率が上がっている。児童の取組み方の変化が家庭でも見られたのだと思われる。 ◆学年の学習時間に見合った宿題の量、内容を再検討する。担任はどの課題に何分かかるのかを把握し、授業と連動した課題（予習復習プリント等）、基礎力を高める課題（ドリル・漢字練習等）等、質を高め、適切な量を与える。 ◆個に応じた学習課題を与えることも重要である。	教職員アンケート④	8.3	83.3	8.3	0.0	91.6	78.5
							児童アンケート⑤	50.9	29.6	17.6	1.9	80.5	
							保護者アンケート③	23.2	40.2	32.9	3.7	63.4	

	（5）	学年の発達段階に応じた読書活動の推進をしたか。	教職員、児童、保護者の**90%**以上が肯定している。 各自の読書目標達成率が80％以上（←振り返りカードにおける実施率　中間期・年度末）	中間期	C	◇昨年度と比較しても、教職員、児童、保護者の肯定割合に大きな変化はない。児童の読書離れが進んでいることもあるが、図書室における蔵書のラインナップや読書空間の改善に大きな変化がないこと、また、学校全体での目標を持たせた読書活動が推進されていないことが大きな理由である。 ◆個々の児童の読書意欲を高めるだけに頼らず、快適な読書スペースの改善に取り組むことや、委員会を中心に継続的な図書の紹介を進めたり、学年間での読書活動の交流等を試みる必要がある。	教職員アンケート⑤	0.0	54.5	45.5	0.0	54.5	55.7
							児童アンケート⑥	43.9	24.3	23.4	8.4	68.2	
							保護者アンケート④	16.7	27.8	38.9	16.7	44.5	
				年度末	C	◇児童の読書目標達成率は53．9％であった。アンケートの結果は、教職員、児童の肯定率は上がっているが、保護者の肯定率は下がっている。家庭で読書をする姿があまり見られないということだろう。みきゃん通帳の入力も難しい面がある。 ◆図書の紹介、学年間の交流、ブックトーク等、松の子タイムを利用して、読書に関心を持ち、本の好きな子を育てる手立てを試みる。主任が学校全体の目標を提案し、それに向けてクラス目標、個人目標を高く設定し、全体の読書量の向上を図る。	教職員アンケート⑤	0.0	63.6	27.3	9.1	63.6	55.4
							児童アンケート⑥	36.4	29.1	21.8	12.7	65.5	
							保護者アンケート④	6.2	30.9	43.2	19.8	37.1	

学校運営協議会の所見	中間期	児童の学力について、定着状況について、客観的な資料をもとに知りたい。 単元テストは何％で◎なのかなど目標値を設定して児童の伸びを確認するのがよいのではないか。 児童と教職員との評価のずれが大きい。教職員は自分たちの実践に自信を持って、もっと良い評価をしてもいいのではないか。	学校の対応	所見の中にある児童の学力については、県学力テストや単元テストなど客観的な評価材料はもちろん大切であり、それも判断材料にしている。しかし、この中に入れていないので、年度末には検討したい。また、学校運営協議会委員から出た「教職員ももっと自信を持って評価してほしい」という意見は全体に伝えたい。 改善策については、しっかりと共有して各学年において実践化していく。
	年度末	児童を読書に向かわせるためにどのような方法があるだろうか。図書室の環境は工夫され改善が見られる。　家庭学習については家庭の力も大きい。家庭と協力して学習習慣を付けていく必要がある。ICTの活用について児童の評価の向上が大きく取組の成果が出ている。個人用の端末をどのように使用しているか。また、従来の学習（字を書く。辞書を調べる。体験的な学習をする。）も大切なのではないか。		教師と児童の意識のずれはあまり問題ではない。教職員はさらなる高みを目指して自分の指導力をあげていく必要がある。学校全体で意識統一して研修を進めていく必要がある。学年や教科によって単元テスト等の到達度に差がある。研修を進め、全教師の力量を高めていく必要がある。読書については課題が残った。親子読書など成果のあった取組を来年度は強化していく。ICT教育を進めながら、従来の学習とICT活用のベストミックスを探っていく。必要に応じて補充学習などを行う。

重点目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察　◆改善方策	評価資料	アンケート結果（%）				肯定率(%)	平均(%)
								4	3	2	1		
2 豊かな心を育む教育の推進	（6）	教育目標「思いやりの心」「たくましい心」の浸透に努めたか。	教職員、児童の**90%**以上が肯定している。	中間期	A	◇教職員、児童ともに肯定的な評価が多かった。しかし、教職員の肯定率が100%に対して、児童の肯定率が81.9%と、認識の違いが生じている。 ◆様々な活動の中で教育目標「思いやりの心」「たくましい心」を意識させ、児童の「思いやりの心」や「たくましい心」が見られた場面を見取り、児童の活動の中で、「思いやりの心」や「たくましい心」や、児童の自己肯定感を高めるような声掛けをしたり、子供たちの良さが生かされる場の確保や互いのよさを認め合う場づくりに努める。	教職員アンケート⑥	41.7	58.3	0.0	0.0	100.0	94.0
							児童アンケート⑬	58.9	29.0	5.6	6.5	87.9	
				年度末	A	◇教職員の肯定率が100%に対して、児童の肯定率が83.6%と、認識の違いが生じている。また、肯定率の低い児童の割合が前期よりも増えているのは、自分に自信のない児童がいるためと思われる。 ◆引き続き、様々な活動の中で教育目標「思いやりの心」「たくましい心」を意識させ、児童の自己肯定感を高めるような声掛けをしたり、子供たちの良さが生かされる場の確保や互いのよさを認め合う場づくりに努めたりする。	教職員アンケート⑥	50.0	50.0	0.0	0.0	100.0	91.8
							児童アンケート⑬	49.1	34.5	9.1	7.3	83.6	
	（7）	道徳科授業づくりの工夫をしたか。	教職員の**90%**以上が肯定している。	中間期	C	◇道徳の授業に対して自信を持って指導することができていないことが、肯定率の低さにつながっているのではないかと考えられる。 ◆道徳の授業づくりについて、教材研究を行い、授業づくりの工夫に努める。また、校内研修等を通して、道徳の指導技術を高めていく。	教職員アンケート⑦	10.0	60.0	30.0	0.0	70.0	70.0
				年度末	B	◇肯定割合は、少し上がっている。これは、校内研修等を通して、道徳の指導研究を行い、道徳の指導技術を高めていくよう努めたからだと考えられる。 ◆引き続き、道徳の授業づくりについて、教材研究を行い、授業づくりの工夫に努めていく。	教職員アンケート⑦	27.3	45.5	18.2	9.1	72.8	72.8
	（8）	「気づき・考え・実行する」青少年赤十字活動の継続に努めたか。	教職員の**90%**以上が肯定している。	中間期	A	◇昨年度に続き、青少年赤十字活動の視点に立った教育活動を継続する事ができた。 ◆今後とも、青少年赤十字活動の視点に立った教育活動を継続していく。	教職員アンケート⑧	8.3	83.3	8.3	0.0	91.6	91.6
				年度末	A	◇昨年度に続き、青少年赤十字活動の視点に立った教育活動を継続する事ができた。また、新しい取組として、登校前の地区別ちょボラを実施し、児童の意識を地域へ広げる工夫をした。 ◆今後とも、青少年赤十字活動の視点に立った教育活動を継続していく。	教職員アンケート⑧	25.0	66.7	8.3	0.0	91.7	91.7
	（9）	返事・あいさつ・後始末の徹底に努めたか。	教職員、児童、保護者、地域の90%以上が肯定している。	中間期	A	◇教職員、保護者、地域ともに高い肯定割合を示しており、目標値を上回っている。学校生活の中では、大きな声で挨拶をしたり、返事をしたりすることができる児童が増えてきている。しかし、家庭での返事についての肯定率が9割を超えていないので、今後の課題として取り組んでいく必要がある。 ◆今後も全教育活動を通して、返事・あいさつ・後始末について継続的に指導していく。また、挨拶や返事について「いつでも、どこでも、だれにでも」を合言葉に児童に呼び掛けたり、学校だより等で発信したりすることで、学校・地域・家庭で連携して指導し、返事や挨拶の習慣化に努める。	教職員アンケート⑨	25.0	66.7	8.3	0.0	91.7	95.9
							児童アンケート⑦	83.0	16.0	0.0	0.9	99.0	
							児童アンケート⑧	65.4	31.8	1.9	0.9	97.2	
							保護者アンケート⑤	42.6	51.9	5.6	0.0	94.5	
							保護者アンケート⑥	33.3	55.6	9.3	1.9	88.9	
				年度末	A	◇あいさつ、後始末において高い肯定割合を示しており、目標値を達成することができた。しかし、中間期に引き続き、家庭での返事についての肯定率が低下していることが課題である。 ◆今後も全教育活動において、返事・挨拶・後始末を継続的に児童に指導していく。また、学級や全校集会等の場で「いつでも、どこでも、だれにでも」が定着するように呼びかける。そして、学校だより等で発信したりすることで、学校・地域・家庭で連携して、返事や挨拶の習慣化に努める。	教職員アンケート⑨	25.0	66.7	8.3	0.0	91.7	91.6
							児童アンケート⑦	79.8	17.4	1.8	0.9	97.2	
							児童アンケート⑧	64.2	32.1	3.7	0.0	96.3	
							保護者アンケート⑤	42.7	47.6	9.8	0.0	90.3	
							保護者アンケート⑥	27.2	56.8	14.8	1.2	84.0	
							地域アンケート①	70.0	20.0	10.0	0.0	90.0	

中間期	学校運営協議会の所見	児童は地域でもよく挨拶をしてくれる。 新型コロナウイルス感染症の流行でマスクをしている時期が長かったが、マスクをしなくてもよくなり、顔の表情がよく見えるようになった。 夏休みの陸上練習に行くときも挨拶をしてくれている。	学校の対応
年度末		どの項目についても成果が上がっていてすばらしい。赤十字ボランティア活動を一緒にしたが、登校時の清掃活動はランドセルや荷物もあるので放課後の方がよい。夏休みのラジオ体操の後にも児童と一緒に清掃活動をした。児童は役に立ちたいと思っている。児童のあいさつから元気をもらっている。集団登校で元気のない児童もいるので声掛けをしている。	

学校運営協議会委員の所見から児童が地域においても挨拶をしていることが分かった。挨拶は人と人をつなぐ基本であることをこれからも大切に指導し続ける。
評価の高かった（6）（8）（9）の項目については、今後も取組を継続していく。
道徳の授業づくりについては、教職員が自信を持って指導できるよう改善策を具体的に研修で取り上げ、実践していく。

保護者や地域の方の協力で充実した赤十字ボランティア活動ができ、あいさつも定着してきている。教育目標「思いやりの心」「たくましい心」を年間を通して、校長始め全職員で常に意識し、児童に伝え続けた。結果児童に浸透し、さまざまな場面でこの目標を達成する姿を見ることができた。地区別人権・同和教育研究協議会や校区別人権同和懇談会を通して人権・同和教育について校内で共通認識を持って研修を深めることができた。

重点目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察　◆改善方策	評価資料	アンケート結果（%）				肯定率(%)	平均(%)
								4	3	2	1		
３　人権を尊重する教育と生徒指導の徹底	（10）	自他の命を大切にする心の育成に努めたか。	教職員、保護者の**90%**以上が肯定している。	中間期	A	◇教職員、保護者ともに高い肯定割合を示しており、目標値を上回っている。道徳科を中心とし、全教育活動を通した児童への関わりにおいて、「自分も周りの人も大切にする」意識付けができていたと考えられる。 ◆今後も全教育活動を通して、「自分も人も大切にする」ことを継続して指導していく。児童の活動の中で、自分や周りの児童を大切にできた場面では、その行動を褒め、互いに大切にし、認め合う集団づくりに努める。	教職員アンケート⑩	33.3	66.7	0.0	0.0	100.0	98.2
							保護者アンケート⑧	64.8	31.5	1.9	1.9	96.3	
				年度末	A	◇中間期と同様、教職員、保護者ともに高い肯定割合を示しており、目標値を上回っている。地区同や校区別人権・同和教育懇談会に向けての全校的な取組を通して、相手を大切に思う心や、互いを思いやる集団づくりができつつあることが考えられる。 ◆3学期も、道徳科や特別活動等を中心として心の教育を行い、「自他の命を大切にする心」の育成に取り組む。	教職員アンケート⑩	41.7	58.3	0.0	0.0	100.0	98.8
							保護者アンケート⑧	65.9	31.7	2.4	0.0	97.6	
	（11）	人間関係づくりを核とした生徒指導の充実と規範意識の育成に努めたか。	教職員、児童、保護者の**90%**以上が肯定している。	中間期	A	◇教職員、児童、保護者とも、肯定割合が高く、目標値に達している。教育相談やなかよしアンケートにより、児童の実態を把握し、いじめの未然防止、早期発見、早期解決に向けて、共通理解を深めたことが高評価につながっている。 ◆今後も児童一人一人に寄り添い、児童のわずかな変化も見逃さないよう、情報交換、共通理解に努める。	教職員アンケート⑪	8.3	83.3	8.3	0.0	91.6	93.1
							児童アンケート⑪	84.1	9.3	2.8	3.7	93.4	
							保護者アンケート⑨	68.5	25.9	3.7	1.9	94.4	
				年度末	A	◇中間期に引き続き、肯定割合が高く、目標値に達している。しかし、保護者の肯定割合の4が4%ほど下がっている。 ◆3学期も引き続き、定期教育相談や仲よしアンケートを実施し、児童の実態把握に努める。また、生徒指導を中心として規範意識の育成を図り、情報を共有しながら、共通理解を図る。	教職員アンケート⑪	50.0	50.0	0.0	0.0	100.0	96.9
							児童アンケート⑪	86.4	9.1	1.8	2.7	95.5	
							保護者アンケート⑨	64.2	30.9	4.9	0.0	95.1	
	（12）	「挑戦を楽しむ」ことができる支持的な集団づくりに努めたか。	教職員の**90%**以上が肯定している。	中間期	B	◇教職員の肯定割合が83%と目標値に達していない。学校目標にある支持的風土づくりに努めたが十分に行えていない。 ◆ぽかぽかカードの活用や終わりの会での友達の良いところの発表など、互いを認め合える場を意図的に設定する。また、2学期は、運動会、陸上大会など大きな行事がある。その中で、めあてを持って活動に取り組ませることで、児童にできた喜びを味わわせたり、自信を持たせたりする。	教職員アンケート⑫	25.0	58.3	16.7	0.0	83.3	83.3
				年度末	A	◇教職員の肯定割合が高く、目標値に達している。運動会や陸上大会などの様々な行事や活動を通して、学校目標を意識した具体的なめあてに向けて指導・支援に努めたことが高評価につながった。 ◆3学期も児童一人一人に明確なめあてを持たせ、それに向かって努力できるよう支援をしていく。	教職員アンケート⑫	33.3	66.7	0.0	0.0	100.0	100.0

中間期	学校運営協議会の所見	大変高い評価になっていてすばらしい。今後も先生方の力を発揮してほしい。 （12）については、Bなので、2学期以降はさらに充実させてほしい。 （12）について、より具体的な評価項目を設定してほしい。児童にアンケートを取ったり、評価カードを作ったりするなどして、目標を設定する。	学校の対応	評価の高かった（10）・（11）の項目については、現在の取組をさらに推進していく。 （12）については、所見を生かして、児童一人一人が目標設定をし、ワークシートに書かせる。また、自己評価をしたり、教師が評価をしたりして満足度や達成度を数値化する。
年度末		（12）『「挑戦を楽しむ」ことができる支持的な集団づくりに努めたか。』について中間期以降どのような取組をしたか。いじめや不登校が起こっていないのでいい。教職員の取組がよい。集団登校で元気のない児童もいるので声掛けをしている。気になる児童は一緒に活動しながら励ましている。		中間期の振り返りを基に目標設定とその反省をより明確にし、学級に掲示したことで「挑戦を楽しむ」ことができる支持的な集団づくりをさらに進めることができた。能登半島地震を受けて臨時に避難訓練をするなどして児童に命の大切さを知らせた。オンラインの授業をするなど個に応じた対応をしている。

重点目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察　◆改善方策	評価資料	アンケート結果（%）				肯定率(%)	平均(%)
								4	3	2	1		
４ 健康・安全教育の推進	（13）	運動の生活化と体力向上を推進したか。	教職員、児童の**90%**以上が肯定している。	中間期	B	◇教職員の肯定率100%に対して、児童は77.5%と意識のずれが生じている。身体を動かすことが好きな児童が多いが、昼休みには決まった児童しか外で遊んでいない。 ◆昼休みに外にはいるが座っている児童も多いので、身体を動かす楽しみや大切さを学級担任が指導していく。また、体力アップ推進計画のもとに体育科を中心として、児童の体力向上に努める。	教職員アンケート⑬	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0	88.8
							児童アンケート⑭	60.7	16.8	17.8	4.7	77.5	
				年度末	B	◇中間期と比較し、教職員の肯定率は低下した。しかし、肯定意見の中には評価値が3から4へと上がったものもあり、教職員の中で意識のずれが生じている。児童については、運動会やマラソン大会などで運動に触れる機会が多くあり、肯定率が上昇したと思われる。 ◆体力アップ推進計画がきちんと浸透していないので、再度周知を行う。また、昼休みは、宿題直しの時間ではなく、外遊びをするよう体育栽培委員会が呼び掛けるなど昼休みの過ごし方を見直させる。	教職員アンケート⑬	16.7	75.0	8.3	0.0	91.7	84.9
							児童アンケート⑭	57.8	20.2	14.7	7.3	78.0	
	（14）	避難訓練や防災教育の充実と判断力・実践力の育成に努めたか。	教職員、児童の**90%**以上が肯定している。	中間期	A	◇交通安全教室や避難訓練の実施により、全体的に高い肯定割合になっている。避難訓練の際に児童一人一人が素早く身を守る行動ができるなど、訓練や学習の成果が出ている。 ◆今後も計画的に避難訓練を実施し、継続した安全指導を行っていく。また、地域との連携を充実させ、安全教育の推進を図っていく。	教職員アンケート⑭	8.3	83.3	8.3	0.0	91.6	95.8
							児童アンケート⑱	85.0	15.0	0.0	0.0	100.0	
				年度末	A	◇全体的に高い肯定率である。避難訓練やシェイクアウトえひめへの取組、その後、学級で振り返りをきちんとしたことが結果として表れている。 ◆12月に行われたスクールガードリーダーの話などを参考にして、3学期は不審者対応の避難訓練を実施し、継続した安全指導を行っていく。	教職員アンケート⑭	25.0	75.0	0.0	0.0	100.0	97.3
							児童アンケート⑱	83.5	11.0	3.7	1.8	94.5	
	（15）	早寝･早起き･朝ごはんの生活習慣づくりを推進したか。	教職員、児童、保護者の90%以上が肯定している。	中間期	B	◇児童の肯定率84%に対して、教職員の肯定率が66%と低くなっている。教職員は健康観察の結果から児童の生活の実態を把握しているので、児童・保護者との認識のずれが生じている。しかし、児童の生活習慣においては、家庭での生活習慣づくりが定着してきている。 ◆基本的な生活習慣は、学校と家庭、地域が一体となって取り組む必要がある。保健だより等を活用して、家庭や地域に現状を発信することから改善に努める。学級指導を通して、食事の大切さや、好き嫌いなく食べることを指導する。また、自ら生活習慣づくりや早寝早起きを意識させていく。	教職員アンケート⑮	16.7	50.0	33.3	0.0	66.7	76.8
							児童アンケート⑨	57.9	26.2	11.2	4.7	84.1	
							保護者アンケート⑦	48.1	31.5	20.4	0.0	79.6	
				年度末	B	◇中間期と比較すると、教職員と児童共に肯定率が上がっている。中間期を振り返り、教職員が基本的生活習慣の改善に取り組んだ結果と言える。しかし、保護者の肯定割合は全体として下がっている。学校と家庭での意識のずれが生じている。 ◆引き続き、学校と家庭が一体となって基本的な生活習慣の定着に取り組む。そして、保健だよりや学級通信を通して、保護者に啓発していく。	教職員アンケート⑮	16.7	75.0	8.3	0.0	91.7	85.0
							児童アンケート⑨	50.9	35.5	10.0	3.6	86.4	
							保護者アンケート⑦	39.0	37.8	23.2	0.0	76.8	

中間期	学校運営協議会の所見	（15）については「推進したか」なので、数値目標による評価ではないのではないか。主に家庭での指導になる。学校は啓発をしていけばよい。	学校の対応	所見の通り、「推進したか」についての評価である視点を共有していきたい。また、改善策の実践とともに教職員も一緒に遊ぶという心のゆとりを持ちたい。 運動面については学力面と同じように個人差が大きくなっている。外遊びの推進を中心に呼びかけていく。
年度末		児童の外遊びが増えてよい傾向である。定期的な避難訓練と臨時の避難訓練の両方を行っていてよい。児童の生命と安全をしっかり守っていく必要がある。早寝・早起き・朝ごはんについては、家庭で教育する部分も多い。これはずっとある課題であり、学力との相関関係も大きい。今後も家庭と協力して指導していく必要がある。		運動の生活化と体力向上の推進については、運動会や陸上競技会もあり、推進しやすく、効果もあった。昼休みに外遊びをする児童が増えた。能登半島地震を受けて、普段とは想定を変えて臨時に避難訓練をした。臨機応変に避難できる力を付けていきたい。生活習慣の指導については今後も家庭と連携し、粘り強く指導を続けていく。

重点目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察　◆改善方策	評価資料	アンケート結果（%）				肯定率(%)	平均(%)
								4	3	2	1		
5 教職員の資質と指導力の向上	（16）	研修活動や自己研鑽の充実に努めたか。	教職員の**90%**が肯定している。	中間期	A	◇初任者研修や人権・同和教育研修を軸に据えた校内研修を計画的に進めている。また、若年教員は、各々のスキルアップを目指して各種校外研修に参加したり、教職経験を積んだ先輩教員との情報交換等で指導力向上を目指している。 ◆年間1人1回以上の研究授業の場で、多様な見方や考え方を吸収することはもちろん、校外の研修会等で学んだことを校内研修の場で共有したり、検討したりすることで相互の専門性を高める。	教職員アンケート⑯	0.0	91.7	8.3	0.0	91.7	91.7
				年度末	A	◇初任者研修や人権・同和教育研修を軸に据えた校内研修を計画的に進めることができた。 ◆OJTを活用した初任者研修、フォローアップ研修を継続し、情報交換を通して、互いの指導力の向上を目指す。	教職員アンケート⑯	0.0	91.7	8.3	0.0	91.7	91.7
	（17）	児童・保護者へのぬくもりのある対応に努めたか。	教職員、保護者の**90%**が肯定している。	中間期	A	◇教職員・保護者共に肯定割合が目標値を上回っている。これは、学校がホームページを通して毎日の学校生活を保護者に伝えたり、学校だより学年通信で学校からの声や思いを伝えたりしている成果が表れていると思われる。 ◆今後も引き続き学校からの発信活動を行うとともに、教育活動における様々な場面や定期的な教育相談で児童の声に耳を傾け、組織的な対応に努める。	教職員アンケート⑰	36.4	54.5	9.1	0.0	90.9	91.7
							保護者アンケート⑭	50.9	41.5	5.7	1.9	92.4	
				年度末	A	◇保護者の肯定割合が目標値をやや下回っているが、学校からの発信や生徒指導関係の保護者連絡等も誠意を持って行ってきた。 ◆今後も学校からの発信活動を行うとともに、なかよしアンケート、定期的な教育相談で児童の思いをくみ取り、全教職員で対応に努める。 ◆児童・保護者からの訴えに対して誠実で早期の対応ができるよう今後も努めていく。また、報告・連絡・相談を確実に行い、役割分担をして組織的な対応ができているので継続したい。	教職員アンケート⑰	41.7	58.3	0.0	0.0	100.0	94.5
							保護者アンケート⑭	37.8	51.2	9.8	1.2	89.0	
	（18）	ワーク・ライフバランスの推進に努めたか。	教職員の**90%**が肯定している。 毎月の超過勤務時間が80時間を超えない教職員の割合100%（中間期　年度末）	中間期	B	◇教職員の多くは日々の仕事に追われているのが実態であるが、健康管理に留意しながら責任感を持って仕事に励んでいる。土日は十分な休息を確保している一方で、多くの教職員が勤務時間を大幅に超えて目標時間勤務している現状に変化はない。 ◆それぞれが先を見通し、計画的な仕事を行うことや仕事に優先順位を設けて取り組む意識が必要である。また、管理職が学校行事やその他の教育活動における効率化を図る改善を進めるなどして、実働時間の短縮を目指す。	教職員アンケート⑱	50.0	41.7	8.3	0.0	91.7	91.7
				年度末	B	◇肯定率は上がったが、多くの教職員が勤務時間を超えて勤務している現状に変化はない。 ◆毎月の超過勤務時間が80時間を超えない教職員の割合は75%であった。先を見通し、計画的に仕事をする意識を高め、実労時間の短縮を目指す。管理職から声を掛ける。時間の長さだけでなく、やりがいにも目を向けていく。 ◆ワークライフバランスは個人の感じ方にもよるので単純に時間だけで図ることはできない。文部科学省からも現場の負担軽減案が出ているので少しずつそれらが実行されるものと思われる。有効な対策が実施されなければ教職員の負担は減らない。現場では、学校行事の精選や仕事の効率化などできることをさらに進めていくことである。	教職員アンケート⑱	33.3	66.7	0.0	0.0	100.0	100.0
	（19）	情報モラルやICT教育の推進に努めたか。	教職員の**90%**以上が肯定している。	中間期	A	◇ICTを活用した授業では、その活用例や方法を指導するだけでなく、SNSによる生徒指導上の問題を未然に防ぐ情報モラルの指導や、児童の調べ活動やまとめ活動におけるに著作権の侵害に関する指導について発達段階に応じて行っている。 ◆夏休み前の学校運営協議会で出た意見を参考に、児童と保護者で家庭内のルールづくりについて改めて確認させた。また、総合的な学習や道徳、学級活動の学習活動を通して知識・技能と態度面の育成を図っていく。	教職員アンケート⑲	25.0	66.7	8.3	0.0	91.7	91.7
				年度末	A	◇SNSの指導は、折に触れ行ってきたので、児童や保護者にも伝わっていると思われる。 ◆児童と保護者で家庭内のルールづくりについて再度確認させる。教職員は情報リテラシーの演習等で研修を深め、児童用端末の扱いについて定期的に指導、声掛けを行う。 ◆スマホ依存などは大人も含めて社会問題になっている。児童生徒においても社会生活にまで支障をきたしている例も見られるようになってきた。家庭と協力して適度な使い方・正しい使い方を今後も指導していく。	教職員アンケート⑲	16.7	75.0	8.3	0.0	91.7	91.7

中間期	学校運営協議会の所見	80時間を超えている先生もいて、大変だと思う。 できるだけ、先生方の負担を減らしたい。 今言われている働き方改革は一律的ではないか。少々の時間オーバーはどの職種にも見られるものである。教職員の働き方改革はどのようにあるのがよいのか。	学校の対応	所見の中にあるように、働き方改革を勤務の超過時間だけで評価するのは危険である。時間だけでなく、働きがいや資質・能力の向上に取り組む時間等を考えなくてはいけない。アフターコロナでいろいろな行事が復活しているが、その中で、本当に大切な行事、必要な教育活動とその方法について考えていかなくてはいけない。
年度末		児童・保護者への温かい対応ができている。地域に対しても同様である。具体的にそのような場面が多くあった。残業は仕方がない面もあるだろう。やりがいが大切である。教職員の自己評価は高い。80時間にこだわりすぎなくてもよいのではないか。これからは情報モラルの指導がますます重要になってくる。		児童・保護者への丁寧で分かりやすい対応を心がけてきた。今後も継続して続けていきたい。また、地域の方へも同様である。残業80時間オーバーの教職員は減少傾向である。効率的な仕事の仕方を追求していく。情報モラルの指導はこれからもやっていく。生成AIにも対応していかなくてはならない。

重点目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察　◆改善方策	評価資料	アンケート結果（%）				肯定率(%)	平均(%)
								4	3	2	1		
６ 組織・運営、家庭・地域との連携	（20）	服務規律の遵守と責任ある校務の遂行に努めたか。	教職員の**90%**以上が肯定している。	中間期	A	◇肯定割合は目標値を超えているが、よくできている4評価は低い。 ◆今後も職員会や研修会等を活用して、服務規律の遵守と綱紀粛正、不祥事の根絶について確認し、徹底を図る。	教職員アンケート⑳	33.3	58.3	8.3	0.0	91.6	91.6
				年度末	A	◇肯定割合が100%となっており、目標を達成することができた。 ◆今後も服務規律の遵守と綱紀粛正、不祥事の根絶についての徹底を図るとともに、保護者、地域の信頼を得るよう努めていく。 ◆適切な校務遂行ができている。今後も服務規律を遵守し、教育公務員として職責を果たしていく。	教職員アンケート⑳	18.2	81.8	0.0	0.0	100.0	100.0
	（21）	家庭・地域と連携した教育活動と地域とともにある学校づくり	保護者、地域住民の**90%**以上が肯定している。 毎月の学校だより、学年通信の発行、ホームページの更新の実施率が90%以上 （中間期・年度末）	中間期	A	◇保護者、地域の肯定割合は、目標を大きく上回っている。これは、学校だよりや学級通信、学校HP等を通して、本校の教育活動を十分に発信することができたからだと思われる。また、校外学習や交流学習等で、地域の方と関わりながら教育活動を進めることもできた。 ◆2学期以降は、行動制限が緩和された中での運動会や学習発表会が開催される。引き続きwithコロナの視点に立って、学校と地域が連携した教育活動を推進していく。	保護者アンケート⑮	63.0	33.3	3.7	0.0	96.3	98.6
							保護者アンケート⑰	45.3	52.8	0.0	1.9	98.1	
							地域アンケート④	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	
							地域アンケート⑤	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	
				年度末	A	◇中間期に引き続き、保護者、地域の肯定割合は、目標を大きく上回っている。運動会やマラソン大会等の行事や、長期休暇の地域活動等で学校と地域が連携して教育活動を行うことができた。 ◆今後も学校教育の中で地域連携する場面を設けたり、子供たちに地域活動に積極的に参加するように呼びかけていく。	保護者アンケート⑮	54.3	43.2	2.5	0.0	97.5	99.1
							保護者アンケート⑰	43.2	55.6	0.0	1.2	98.8	
							地域アンケート④	90.0	10.0	0.0	0.0	100.0	
							地域アンケート⑤	90.0	10.0	0.0	0.0	100.0	
	（22）	整理整頓等、美しく落ち着きのある教育環境づくりに努めたか。	教職員の**90%**以上が肯定している。	中間期	B	◇肯定割合は目標値を下回っている。校内の整理整頓をしたり、季節に合った掲示などで美しい教室環境を整えることに務めていたと思われるが、十分ではないところがあり、4評価が低くなったのではないかと思われる。 ◆2学期以降も引き続き教室内の整理整頓、季節に合った環境整備に努め、落ち着いた環境で児童が学習に取り組めるようにする。終わりの会で児童自身が自分の座席の回りやロッカーの中のチェックをするなど、教員だけでなく、児童自身に整理整頓、美しい教室環境を整えようとする意識を持たせたい。	教職員アンケート㉒	16.7	66.7	16.7	0.0	83.4	83.4
				年度末	A	◇肯定割合が100%に達した。校内の整理整頓をしたり、季節に合った掲示などで美しい教室環境を整えることができた。 ◆引き続き、児童とともに美しい教育環境づくりを進めたり、季節にあった環境整備に努めていく。 ◆肯定割合が100%となっているが、整理整頓が行き届いていない教室もある。基準を厳しくして、もう一度取組を見直すべきである。	教職員アンケート㉒	8.3	91.7	0.0	0.0	100.0	100.0

その他・自由意見					
	中間期	学校運営協議会の所見	大変良い結果である。 地域の行事も復活してきたので、児童にも参加してもらって盛り上げてもらいたい。 地域の行事に多くの児童が参加したり、見学に来たりしてほしい。 地域行事の由来に詳しい方もいるので、総合的な学習の時間にゲストティーチャーとして活用してはどうか。	学校の対応	改善策について全教職員でしっかりと実践していく。また、地域の行事への参加については、その活性化のためにも学校ができることに対して協力体制を整えていく。所見にあるように、地域も行事の復活に向けて取り組んでいるがなかなかの状態である。学校と地域がWinWinの関係になるよう連携を図っていく。
	年度末		すべての評価がAになりすばらしい。教職員が登校指導など児童を見守っていてうれしく思う。地域全体で子供を育てるという感覚が大切である。これまでも地域と学校が一体となって教育をしてきた。これからもそうありたい。学校と地域が一緒に行うボランティアが引き継がれている。		家庭・地域との連携を意識してきたが、高い評価をいただくことができた。今年度の取組について一定の評価がされたが、来年度もよいものは継続し、改善点についてはさらに一生懸命取り組んでいきたい。教育環境についてA評価となったが、さらなる工夫が必要である。児童が効果的に学習できる環境を整えていく。